

自己意識と自我体験——「私」への「なぜ」という問い——の関連¹⁾

天 谷 祐 子²⁾

名古屋大学大学院教育発達科学研究科

公的・私的自己意識と自我体験——「私」への「なぜ」という問い——の関連を検討した。自我体験とは、「私はなぜ私なのか」、「私はどこから来たのだろうか」といった水準の「私」への問いである。この点について、中学生 239 名・大学生 228 名を対象に、質問紙調査を行った。その結果、中学生においては、公的・私的自己意識の分化はあまり見られなかった。しかし、自我体験を報告した群の方が未体験群よりも公的・私的自己意識間の相関が低く、より分化が見られた。そして、公的・私的自己意識双方と自我体験の間に関連が見られ、中学生においては、公的・私的自己意識と自我体験の間に密接な関連があることが示された。一方大学生では、私的自己意識だけに自我体験との間に関連が見られた。また自我体験については、118 名の中学生と 108 名の大学生から自我体験が報告され、体験率は中学生が 49.4%・大学生が 47.4%であった。

キーワード：自己意識，自我体験，中学生，大学生

問題と目的

社会心理学における自己に関する研究は、それが対人行動や社会的行動にどのように影響を及ぼすかという観点から研究が重ねられてきた。その中で、公的・私的自己意識特性は、自分に注意を向けるという過程を特性として捉えたもので、Fenigstein, Scheier & Buss (1975) によって提唱された。私的自己意識は、感情や態度など、「他者からは観察できないプライベートな自己」に注目するもの(辻, 1993)、公的自己意識は、他者をはじめとした社会的側面に関わる「他者からも

観察可能な(辻, 1993)」自己に注目するものである。公的・私的自己意識特性は、多くの自己の静態的把握(押見, 1990)だけでなく、社会的行動や社会心理学的現象を説明する有用な性格特性概念として注目を集めてきた(黒沢, 1993)。またこの自己意識特性は、対人関係の各特性、例えば、シャイネス(今井・押見, 1987)、自己モニタリング(押見・渡辺・石川, 1986)、対人不安(菅原, 1984)、孤独感(諸井, 1987)との関連が検討されてきた。

これらの公的・私的自己意識研究は、社会的な場面における各々のふるまいが、その中心的な関心事となっており、主に青年期やそれ以降の時期を対象とした研究が重ねられてきた。しかし、子どもが社会的文脈において、この点でどのように発達していくのかという視点を取り入れることは、今後重要になってくると考えられる。最近では、社会心理学的視点を取り入れた発達研究も見られるようになってきており(藤崎, 1994)、公的・

1) 本論文の一部は、筆者が 1997 年度に名古屋大学大学院教育学研究科に提出した修士論文を加筆修正したものである。また本研究は、日本心理学会第 62 回大会、日本発達心理学会第 10 回大会で発表された。

2) 本論文の作成にあたり、ご指導賜りました名古屋大学村上隆教授、福井大学大野木裕明教授に深く感謝いたします。

私的自己意識についても、少ないながら発達の観点を持った研究が出てきている。例えば、後藤・向山・辻・黒丸・新田・村田(1989)は、中1から高3までを対象に公的・私的自己意識尺度を用い調査を行っている。その結果、公的・私的自己意識は遅くとも青年前期(中2から中3頃)には分化し、その後男女により異なった発達をたどるとしている。また桜井(1992)は、小学校高学年向けの公的・私的自己意識尺度を作成し、対人不安傾向、自己顕示欲求との関係を検討している。その結果、公的自己意識との関係は従来の大学生を対象とした研究と類似した結果(対人不安傾向と正の相関、孤独感と正の相関等)となったが、私的自己意識については、対人不安傾向と負の相関、自己顕示欲求と正の相関、孤独感との負の相関が見られ、高校生・大学生を対象とした結果と逆になっている部分が多く見られた。桜井はこれらの結果から、小学校高学年は自分の内面にやっと注目できるようになった時期であり、そうする児童の方が、自分をよく認識しているのではないかと述べている。そして辻(1993)は小学4年では公的・私的自己意識の分化がまだ曖昧であることを指摘し、「小学校中学年頃に未分化な自己の意識から公的自己意識が分化しはじめ、小学校高学年かそれ以降になって、私的自己意識が発達してくるのではないかと述べている。

以上の発達の観点からの公的・私的自己意識の研究は、発達段階ごとの各自己意識得点の変化や、小学校高学年生における各自己意識と他の要因との関わりについての検討にとどまっている。公的・私的自己意識の発達や分化にどういった要因が寄与しているのかという観点からの実証的検討を行ったものはまだ見られないと言える。本研究では、公的・私的自己意識の分化の渦中にあると想定される中学生と、その分化後の大学生を対象として、発達の観点から横断的に公的・私的自己意識について検討する。

ところで、公的・私的自己意識において特に検

討されている自己とは、対人行動・社会的行動などに影響を及ぼすような心理的背景の中で生じ、機能するような自己であり(中村, 1990)、そのような自己を意識するという作用そのものについてである(辻, 1993)。この公的・私的自己意識の分化の背景には、より深い水準の「私」、いわゆる「自我」に関わる問いが関わっていると考えられる。岡田(1993)は、自分自身の内面へ関心を向けることが、自我同一性確立の前提になるものと指摘している。しかし自我同一性について中高生を対象とした場合、下山(1981)は早期適応型(中高生版フォークロージャー型)の「自分のことを考え、自分を創造していく必要が何もない」者が多く見られる結果を示している。また、Marcia(1966)によるアイデンティティ・ステータスの「達成」や「モラトリアム」の出現割合は、15歳で4%と、ほとんど見られなかった(Marcia, 1993)。これらの結果は、中学生を対象に自我同一性を問題とした場合、大半が「自我」について問いかねない結果となっていることを示している。

しかし実際は、中学生の時期においてもいわゆる「自我」について思いめぐらすことがないわけではないと考えられる。例えば福島(1999)は、中学生の臨床事例において、否定的・対抗的な形でアイデンティティを模索しようとしている例があることを指摘している。このことから、扱う領域を考慮すれば、中学生においてもいわゆる「自我」について思いめぐらすという結果を示すことができると考えられる。その1つとして本研究では、より深い「自我」に関わる問いを扱うものとして、中学生の約半数の者が取り組む自我体験に注目する。自我体験は、『私1(その人の属性や身体といった諸規定からなる私とは独立した私)』への『なぜ』という問い』と定義されている現象である(天谷, 2002)。こうしたいわゆる「自我」に関わる問いかけを検討する際、特に中学生を対象とした場合には、自我同一性よりも、この自我体

験を取り上げる方が有効であると考えられる。また大学生を対象とした場合においても、天谷(2004)では55.3%の者から自我体験の報告を得ており、自我体験は中学生・大学生ともに適用できると言える。

さて自我体験とは、より深い水準の「私」、いわゆる「自我」に関わる問いであると述べた。自我体験において問われている「私」とは、「日常的に使用される『私』や『他の人とは異なる唯一の私』、『私の独自性』、『私の自己規定』」(天谷, 2003)、すなわち社会的文脈における自己意識とは異なり、「この私という特別なあり方そのもの」(永井, 1991)に相当し、いわゆる靈魂・たましいといった呼び方をする場合もある³⁾。永井(1991)は、この水準の「私」への問いを以下のように述べている。「なぜか私は、二十世紀の後半というこの時期に、そしておそらくはこの時期だけに存在している。私は十三世紀にも、二十三世紀にも存在することができたはずだし、いかなる時代にもまったく存在しないこともできたはずである。だがしかし、私は誕生し、今ここに(だけ)存在している、これは驚くべきことではないか。」また天谷(2002)は自我体験の代表的な問いに、「私はなぜ、他の時代に存在したかもしれないし、Aさんであったかもしれないのに、現在ある私なのか」といった例を挙げている。つまり、私1(天谷, 2002)への問いを自ら発することをもって、自我体験としている。

そして自我体験について松田(1990)は、自我体験を契機に自己への強い関心が出てくることを指摘し、Montemayor & Eisen (1977)の調査における12歳前後の自己記述内容の発達的变化を、自我体験に伴う視点の変化としている。これは、公的・私的自己意識の高まりと分化が自我体験と関

連していることを示している。自我体験によって、深い水準の「私」について問いかけることは、その後いろいろな側面の「私」について認識することに関心が高くなると考えられる。そういった作業を通して、意識作用としての公的・私的自己意識の双方が分化してくるものと考えられる。以上のことから、自我体験を経た中学生の方が、そうでない群よりも公的・私的自己意識の分化が進んでいると予想される。また逆に、公的・私的自己意識の分化と共に、自我体験に至る可能性も考えられる。

一方大学生の時期になると、公的・私的自己意識の双方がすでに分化している。社会心理学における公的・私的自己意識研究は、大学生の時期には、すべての人が一様に公的・私的自己意識が分化しているという暗黙の了解を背景に、大学生を主な対象として多くの研究が蓄積されてきている(例えば押見(1992)によって大学生を主な対象とした公的・私的自己意識に関する一連の研究が紹介されている)。したがって大学生の場合には、自我体験の有無による公的・私的自己意識の分化の度合いに差が見られないと想定される。そして大学生では、分化した公的・私的自己意識がそれぞれ独自の役割を持っていると考えられる。特に私的自己意識と自我体験との間に関連があることが予測される。Scheier (1980)は、私的自己意識の高い者は、その時々での自分の意見、態度を自覚していることを指摘している。つまり、自我体験を経た者の中で、私的自己意識の高い者はそうでない者よりも、自身の自我体験をより自覚し、重く受け止め、自我体験を報告しやすいと考えられる。また大学生の時期は、自己の内面や生き方に対する問い直しの時期にあたる。大学生の時期に、そのような問い直しを活発に行う者は、過去に経た自我体験が顕在化したり、新たに自我体験が見られたりする場合があると考えられる。そして、公的自己意識については、高校生以降はそれが低下するという菅原・山本・松井(1986)の指摘や、

3) いわゆる靈魂やたましいが、ここでの「私」と全く同じものを指していると主張しているわけではない。これらの間には類似した点が多いけれども、異なる部分も存在する(永井, 1991)。

社会的基準が重視されるようになるという観点から、大学生では自我体験と関連が薄いと想定される。

以上のことから本研究では、中学生にとっては公的・私的自己意識の分化と自我体験との関わり、また大学生にとっては公的・私的自己意識と自我体験との関わりを検討するために、以下の仮説を設定した。

仮説1. 中学生では、自我体験を経ている者の方が公的・私的自己意識の分化が見られるであろう。大学生は、自我体験の有無とは関わりなく公的・私的自己意識の分化が見られるであろう。

仮説2. 中学生では、自我体験と公的・私的自己意識の間に関連が見られるであろう。大学生では、自我体験と私的自己意識の間の関わりが見られ、公的自己意識とは関わりが見られないであろう。

このような仮説をもとに、中学生と大学生を対象に、自己意識と自我体験との関わりを検討する。このことで、公的・私的自己意識の分化の背景となっている要因を発達的に検討することができる。また、自我体験の内容やその体験率の発達差についても検討する必要があることから、この点の検討を補足的な目的とする。

方 法

調査対象 中学生239名(男127名,女112名),大学生228名(男83名,女145名),計467名(男210名,女257名)⁴⁾。中学生は愛知県内の公立中学の生徒,大学生は愛知県内の国立大学生であった。

4) 本研究の目的に照らして、公的・私的自己意識の分化が見られる時期としては中学生が代表的であると判断した。またこの中学生の結果を、公的・私的自己意識が既に分化している大学生のデータと比較すると、より違いが際立つと想定した。そして自己への問い直し作業による自己意識の高まりにあたる時期としては、大学生が代表的であると判断した。高校生を対象としなかったのはこのためである。

調査時期 中学生は1997年11月,大学生は1998年6月に調査を実施した。

調査手続き 中学生,大学生ともに,授業中に集団で実施した。

質問紙 中学生群も大学生群も同じ質問紙を使用した。用いた質問紙は以下の内容のものである。

1. **公的・私的自己意識尺度**: Fenigstein et al. (1975)の尺度を翻訳した菅原(1984)による自己意識尺度21項目のうち,因子負荷量.55以上の16項目⁵⁾で,公的自己意識下位尺度8項目,私的自己意識下位尺度8項目であった。5段階評定で「あてはまる(5)」「ややあてはまる(4)」「どちらともいえない(3)」「ややあてはまらない(2)」「あてはまらない(1)」であった。

2. **自我体験についての質問項目**: 自我体験の例を集めた15項目(1. 自分はどこから来たのだろうか? 2. 自分はどこへ行くのだろうか? 3. 自分は何だろうか? 4. 自分は誰だろうか? 5. 一体何をもち「自分」としているのか? 6. 自分の正体って何だろうか? 7. 自分の存在そのものが不思議だ。8. 自分は本当に自分か? 9. 自分はなぜ自分なのだろうか? 10. だれでもなく, どうして自分なのだろうか? 11. 自分が自分であることが不思議だ。12. なぜ私はこの体をえらんだのか? 13. 私が私としてでなく, 他のだれかとして生まれたということもありえたのに, どうして私となっているのだろうか? 14. いろいろな人がいるのに, なぜたまたま私なのだろうか? 15. 自分はなぜ他の国や他の時代ではなく, 日本の, この時代に生まれたのか?)について, 5件法(思ったことがある, 近いことを思ったことがある, 何となくあったような気がする, 思ったことがない, わからない)での評定を求めた。この質問項目は, 天谷(2002)の自我体験についての面接調査で得られた自我体験

5) 自我体験についての質問や自由記述でかなりの労力を回答者にかけることに考慮し, 負担を軽減するため, 項目数を減らした。

の具体例や、その面接調査の導入として使用された質問項目から作成されたものである。また、事前の面接において質問項目の内容確認も行い、自我体験についての質問項目とするのに妥当であると判断された。その後、15項目の中で一番よく思ったものと二番目によく思ったものについてそれぞれ、どんな風に思ったのか、自由記述を求めた。

結果の整理 公的・私的自己意識と自我体験の関連は両尺度の相関から、公的・私的自己意識の分化は両者間の相関の高低によって検討した。また、収集したすべての自由記述について、自我体験とみなせるかどうかを判定した。得られた自由記述（大学生は延べ310例で、番号の書き込みのみ45例を除く265例が判定対象、中学生は延べ262例で、番号の書き込みのみ24例を除く238例が判定対象）について、自我体験とみなされるかどうかを、筆者と心理学を専攻している大学院生とで独立に評定を行った。大学生の56の自由記述（全判定対象の21.1%）による一致率は76.8%、中学生の43の自由記述（全判定対象の18.1%）による一致率は74.4%と十分とは言えないが比較的高い値が得られたので、残りの評定は筆者一人で行った。

この場合に、自由記述を自我体験とみなす基準は、自我体験の定義に沿った水準の「私」に問いの内容が焦点付けられていること、人に聞かれたり、耳にしたりだけでは不十分で、自分から自発的に問いに向き合っていることであった。詳しくは天谷(1999)に述べてある。得られた自由記述が自我体験とみなせるものは「体験群」、自我体験とみなすには記述が不十分であったり、質問項目の内容をそのまま記述しただけのものを「あいまい群」、自由記述は見られるが、自我体験とは明らかに異なる内容を記述していたものを「誤解群」、自由記述が見られなかったものを「未体験群」とした。

結果と考察

1. 公的・私的自己意識について

公的・私的自己意識の尺度について、中学生・大学生それぞれについて信頼性係数を求めた。その結果、中学生では公的自己意識尺度が $\alpha=.90$ 、私的自己意識尺度が $\alpha=.83$ 、大学生では、公的自己意識尺度が $\alpha=.90$ 、私的自己意識尺度が $\alpha=.81$ であった。

そして公的・私的自己意識の尺度について、中学生・大学生それぞれで相関係数を求めた。その結果、中学生では両者の間の相関は.70 ($p<.001$)、大学生については.36 ($p<.001$)であった。大学生を対象とした菅原(1984)の結果では.14、Fenigstein et al. (1975)の原版では.23、.26であった。またFenigstein et al. (1975)のものを菅原(1984)とは異なる形で翻訳した押見ら(1986)では.38の相関であった。他にも押見(1990)は、これまでの内外の研究における両者の相関を表にまとめているが、.30台の中程度の相関が多い。このことから、本研究での大学生の.36という値はほぼ平均的な値であるといえ、公的・私的自己意識は相対的に独立であると思われる。

一方で、中学生の.70という値は非常に高い値である。中学生にとっては公的自己意識と私的自己意識はまだ十分に分化していない段階にあると思われる。しかし、桜井(1992)が作成した児童用自己意識尺度（小学校高学年生対象）においては、両者の間に.34という相関係数が得られている。本研究で採用した項目内容が中学生にとってはやや難しい言い回しだったことがこうした結果を生んだのかもしれない。

2. 自我体験について

(a) **自我体験の体験率** 自由記述内容を分類した結果、中学生では118名から、大学生では108名から自我体験とみなされる報告が得られた(Table 1)。このことから自我体験の体験率は、中学生では49.4%、大学生では47.4%となった。中

学生群と大学生群について、人数の極端に少なかった誤解群（中学生8名，大学生2名）を除く3群（以後同様に，誤解群を除く3群を分析対象とする）で， χ^2 検定を行ったところ，有意であった（ $\chi^2(2)=40.83, p<.01$ ）。さらに残差分析を行った結果，未体験群は大学生が有意に少なく（ $p<.01$ ），あいまい群は中学生群が有意に少ない（ $p<.01$ ）結果となった。体験群については有意な差は見られなかった。

Table 1 自我体験の体験率と χ^2 検定結果

	未体験群	あいまい群	体験群	計
中学生（人数）	57	56	118	231
（出現率：％）	24.7	24.2	51.1	
（調整された残差）	5.45**	-4.88**	0.70	
大学生（人数）	14	104	108	226
（出現率：％）	6.2	46.0	47.8	
（調整された残差）	-5.45**	4.88**	-0.70	
計	71	160	226	457

注．中学生・大学生ともに誤解群（8名，2名）を除く。
** $p<.01$

(b) **自我体験の質問項目** 自我体験の質問項目15項目について，まず中学生のみの主成分分析を行った。その結果，第1因子の固有値が8.00と十分に高く（第2因子の固有値が1.17，第3因子の固有値が0.90），1因子性が高いとみなされた（Table 2）。この15項目を合計して自我体験尺度とし，尺度得点を算出した（ $M=41.46, SD=14.39$ ）。また，信頼性係数は $\alpha=.94$ であった。さらに，自由記述によって分類された自我体験の3群について，自我体験尺度得点に差が見られるかどうかを，1要因の分散分析を行い検討した。その結果（Table 3），主効果が見られた（ $F(1, 228)=68.43, p<.001$ ）。Tukey法による多重比較を行った結果，未体験群よりもあいまい群の方がこの得点が高く（ $p<.05$ ），さらにあいまい群よりも体験群の方がこの得点が高かった（ $p<.05$ ）。

大学生について同様の分析を行ったところ，主成分分析については，第1因子の固有値が6.87と十分に高く（第2因子の固有値が1.51，第3因子の固有値が1.07），1因子性が高いとみなされた

Table 2 自我体験の質問項目と主成分負荷量

	主成分負荷量	
	中学生	大学生
1 自分はどこから来たのだろうか？	.70	.65
2 自分はどこへ行くのだろうか？	.67	.58
3 自分は何だろうか？	.76	.69
4 自分は誰だろうか？	.76	.70
5 一体何をもって「自分」としているのか？	.71	.68
6 自分の正体って何だろうか？	.78	.72
7 自分の存在そのものが不思議だ。	.77	.72
8 自分は本当に自分か？	.71	.72
9 自分はなぜ自分なのだろうか？	.75	.78
10 だれでもなく，どうして自分なのだろうか？	.76	.71
11 自分が自分であることが不思議だ。	.77	.70
12 なぜ私はこの体をえらんだのか？	.68	.47
13 私が私としてでなく，他のだれかとして生まれたということもありえたのに，どうして私となっているのだろうか？	.66	.69
14 いろんな人がいるのに，なぜたまたま私なのだろうか？	.76	.73
15 自分はなぜ，他の国や他の時代ではなく，日本の，この時代に生まれたのか？	.67	.53
第1固有値	8.00	6.84
説明量	53.3%	45.6%

Table 3 自我体験尺度分析結果

		未体験群	あいまい群	体験群	F値	下位検定
中学生	人数	57	56	118		
	自我体験尺度得点 (標準偏差)	26.65 (5.51)	42.39 (11.40)	48.17 (13.37)	68.43***	体験群>あいまい群>未体験群
大学生	人数	14	104	108		
	自我体験尺度得点 (標準偏差)	29.50 (1.87)	48.80 (11.80)	52.60 (11.07)	27.45***	体験群>あいまい群>未体験群

*** $p<.001$

Table 4 自我体験とされた自由記述例

<中学生>

- ・ 何で私がいるのか、ここにいるのがどうして私なのか (中2女, 初発不明).
- No.1 なんでもぼくはぼくなんだろう, ぼくはどうしてぼくになったんだろうなどと思った (中2男, 初発不明).
- ・ 友達が自分で, 自分が友達であってもおかしくないはず, なぜ自分なのかと思った (中2男, 小学6年初発).
- ・ もし自分が違う名前や体だったら自分はどこの人なのかなあと思ったことがある (中3女, 中2初発).
- No.2 私はなぜ私なのか, 私の体に別の心が入っていたならば, 今の私の心はどこでどうしているのだろうか? どこかに「心の国」というのがあって心がたくさんたまっているのか (中1女, 小学5年初発).
- ・ 自分はどこから来て, なぜこの時代の日本に生まれたのか不思議に思った (中2女, 小学6年初発).
- ・ 自分はだれだろうか, 自分はなぜ自分なのかわからない時がたまにあった, どうしてここにいて自分として生きているのだろうか (中3男, 初発不明).

<大学生>

- No.3 私の父と母が別の人だったら私の意識は存在しないのか, それとも他の赤ちゃんの体に私の意識が宿るのか (大学1年女, 小学3, 4年初発).
- ・ どうして自分がこの体の中に潜んでいるのか, いったいこの体の中のどこに自分があるのかって思った (大学1年男, 初発不明).
- No.4 自分という存在は確かにあるのに, 物質的でないというか頭の中の意識としてのみ存在しているということが不思議だったので, 例えば肉体的に死を迎えた瞬間の自分は一体どうになってしまうのか (大学2年女, 小学4, 5年初発).
- ・ 今のお父さんお母さんの子どもとしてここに生まれたことが不思議だと思った, 他の両親の子であったかもしれないのと思った (大学1年女, 小学5年初発).
- ・ 他の国他の時代に生まれることもありえただけ, たまたま現在の自分に生まれたのはどうしてだろうと思った (大学1年女, 小学生初発).
- No.5 「魂」があるとして, 永遠に時が続くのも恐かったし (輪廻転生のこと), 消滅することも恐かった, 「魂」がないと考えるのもいやだった (大学1年男, 小学2年初発).
- ・ 大きな宇宙の中で自分は何なのかと思った, どうして自分はいるのかと思った (大学2年女, 小学1, 2年初発).

注. 「初発不明」とは, この体験の初発がいつかわからないと被調査者が報告したものである.

(Table 2). この15項目を合計して自我体験尺度得点とし, 尺度得点を算出した ($M=49.29, SD=12.35$). 信頼性係数は $\alpha=.91$ であった. また自由記述によって分類された自我体験の3群について, 自我体験尺度得点に差が見られるかどうかを, 1要因分散分析を行い検討した. その結果 (Table 3), 主効果が見られた ($F(1, 223)=27.45, p<.001$). Tukey法による多重比較を行った結果, 未体験群

よりもあいまい群の方がこの得点が高く ($p<.05$), さらにあいまい群よりも体験群の方がこの得点が高かった ($p<.05$).

(c) 自我体験の内容 得られた自我体験の報告の一部を Table 4 に示す. 中学生の自由記述と大学生の自由記述を比較すると, 大学生の自由記述の方がやや難しい言い回しを用いる傾向が見られる (Table 4 の No. 3, No. 4 の記述のように, 「意

Table 5 自己意識尺度と自我体験との相関 (中学生)

	未体験群 (n=57)			あいまい群 (n=56)			体験群 (n=118)		
	私自	公自	自我体験	私自	公自	自我体験	私自	公自	自我体験
私的自己意識									
公的自己意識	.86***			.62**			.54***		
自我体験	-.04	.08		.58***	.54***		.45***	.32***	
平均値	18.95	21.28	26.65	25.14	28.27	42.39	25.92	29.70	48.17
標準偏差	(5.94)	(8.56)	(5.51)	(6.08)	(6.51)	(11.40)	(6.86)	(6.35)	(13.37)

*** $p < .001$

識」という表現の使用, Table 4 の No. 4, No. 5 の記述のように, 「物質的」, 「輪廻転生」など難しい表現の使用など). 中学生の記述については, やさしい言い回しで素朴な表現が見られる (Table 4 の No. 2 の記述のように, 「心」という表現の使用など).

しかし, 中学生・大学生いずれの自由記述についても, 内容的には同じように, 「私1」を想定していると思われる. 例えば, Table 4 の No. 1 の例について, 後に出てきた「ぼく」は現在の具体的な個人としての私である. 一方, 先に出てきた「ぼく」は, 現在の一回限りの存在である私の諸規定から時間的空間的に独立した「私1」を想定していると考えられる. つまり「なんで私1は現在の私なんだろう, 私1はどうして現在の私になったんだろう」ということである. このケースの場合は, 「私1」と現在ある私の関係やその必然性についての疑問であると思われる. 以上から, この例については「私1」を想定した自我体験であるとみなすことができる.

3. 自我体験と公的・私的自己意識尺度の関係

自我体験の3群ごとに, 公的・私的自己意識下位尺度間の相関係数を求めた. その結果, 中学生については未体験群が.86, あいまい群が.62, 体験群が.54であった (すべて $p < .001$, Table 5). さらにこの3つの相関係数の間に有意差があるかどうかを検定した (岩原, 1965 による Z 変換に基づく対応のない相関係数の差の検定). その結果, 未体験群とあいまい群の間, 未体験群と体験群の

間に有意差が見られた (順に $CR=2.94$, $p < .003$, $CR=6.74$, $p < .003$). しかし, あいまい群と体験群の間は有意ではなかった ($CR=0.73$, *n.s.*). 大学生については, 自我体験との相関係数は, 未体験群に有意傾向が見られ (.46, $p < .10$), あいまい群が .27 ($p < .01$), 体験群が .37 で有意であった ($p < .001$, Table 6). さらに3つの相関係数の間に有意差があるかどうかを検定した結果, 有意差は見出されなかった. 以上から, 中学生については未体験群よりも体験群の方が相関の値が有意に低くなっており, 体験群の方が未体験群よりも公的自己意識と私的自己意識の間の分化が見られることが示された. また大学生については3つの体験群の間で, 相関係数が変わらない結果となった. このことから仮説1は支持されたとと言える.

次に中学生について公的・私的自己意識下位尺度と自我体験尺度間の相関係数を求めた. その結果 (Table 5), 未体験群ではこの値は有意でなかった. あいまい群では私的自己意識尺度との間が.58, 公的自己意識尺度との間が.54, 体験群は私的自己意識尺度との間が.45, 公的自己意識尺度との間が.32であった (すべて $p < .001$).

大学生について, 公的・私的自己意識尺度と自我体験尺度間の相関係数を求めた結果 (Table 6), 未体験群はこの値が有意ではなかった. あいまい群では私的自己意識尺度との間が.34 で有意 ($p < .001$) であったが, 公的自己意識尺度との間は値が有意ではなかった. 体験群では私的自己意識尺度との間が .40 ($p < .001$), 公的自己意識尺度と

Table 6 自己意識尺度と自我体験との相関（大学生）

	未体験群 (n=14)			あいまい群 (n=104)			体験群 (n=108)		
	私自	公自	自我体験	私自	公自	自我体験	私自	公自	自我体験
私的自己意識									
公的自己意識	.46 [†]			.27**			.37***		
自我体験	.32	.02		.34***	.08		.40***	.13	
平均値	26.07	26.50	29.50	31.69	30.71	48.30	32.83	31.50	52.60
標準偏差	(5.39)	(9.17)	(1.87)	(5.56)	(6.16)	(11.80)	(5.28)	(5.66)	(11.07)

*** $p < .001$, ** $p < .01$, [†] $p < .10$

の間は値が有意ではなかった。以上のことから、中学生については公的・私的自己意識両者が自我体験と関わっており、大学生については私的自己意識のみが自我体験と関わる結果となった。このことから仮説2は支持されたとと言える。

結 論

1. 公的・私的自己意識と自我体験

中学生にとっての公的・私的自己意識と自我体験
本研究の結果、中学生については公的・私的自己意識の分化はまだ見られないことが示された。しかしその中でも、自我体験を報告した群の方が分化がやや進んでいた。自我体験を報告した中学生は、公的・私的双方を含めた自己知識への意識が、そうでない群よりも先んじて分化していると推測される。また本研究では、経たか経ないかという形式の現象である自我体験が、特に自我体験を経た直後である中学生の世代において、公的・私的自己意識の分化に寄与していることが示された。

公的・私的自己意識はいずれも自我体験と関わりがあった。梶田 (1994) は、青年は「自我に目覚めて自らの内面世界を尊重し、自己と対話する習慣を形成することが必要である」と述べている。しかし中学生の場合にも、自我体験を経て、内面世界だけでなく、第二次性徴に伴う身体の変化などの自己の外的な側面や、他者を気にしながらの人間関係といった公的側面についても、自己の客観的把握を試み、それを理解しようとすることで、

自分なりの世界観を形成していこうとするのだと考えられる。

大学生にとっての公的・私的自己意識と自我体験
本研究では大学生について、私的自己意識と自我体験が関わっていることが示された。大学生にとっては、過去の自身の自我体験から現在までにタイムラグがあることから、現在の私的自己意識のあり方に過去の自我体験が直接関わるとは考えにくい。しかし過去の自身の自我体験を報告する大学生は、より自分について注目し、深く考える性質を持っていると思われる。自己の内面に注目しながら、自分自身の視点で自我体験に見られるより深い水準での「私」や自分自身の世界観についても試行錯誤を試み、問い直すものと思われる。ただ、桜井 (1992) が大学生の私的自己意識が自分に注意が向きすぎるニュアンスで捉えられていることを指摘しているように、あまりにも私的自己意識が高いことは自己に執着しすぎることもとなると考えられ、このことをうまく乗り越えることも重要なことと思われる (梶田, 1994)。

2. 自我体験について

自我体験の体験率は、中学生群・大学生群ともに半数程度となった。本研究の結果は、大学生においても、過去の自身の自我体験をある程度記憶しており、それを報告したことを示している。また天谷 (2002) の中学生対象の面接調査や、天谷 (2004) の中学生から大学生を対象とした質問紙調査でも、体験率は半数強であった。このことから、自我体験は約半数程度の者から報告されうると予

想される。自我体験は、全ての者に見られるものではないが、身近なものであるようである。そして中学生群・大学生群ともに体験率が同程度であるのは、自我体験が児童期後半から青年期初期に特有の体験であることを示唆している。この点について哲学者の永井(1996)は、自我体験での問いが「子ども」の問いの中心的なテーマであると指摘している。また自我体験の内容について、中学生群・大学生群双方からの報告は、言語表現の難易度の違いはあるが、ほぼ同質なもの報告されている。こうして自我体験を経た後の年数に関わりなく、ある程度自我体験の本質が変わらないまま報告されることが示された。

3. 今後の課題

本研究では、公的・私的自己意識と自我体験の関連について検討した。しかし今後へ向けての課題も残された。本研究では、自我体験を報告した者をすべて一括にして捉えて検討を行った。しかし自我体験を経る者にとって、その位置づけは大きく異なると思われる。例えば、本人にとってネガティブな影響を与えるような自我体験が引き起こす問題点について検討すべきであろう。伊藤(1995)は「個別性への気付き」について、ポジティブな面とネガティブな面とがあることを指摘して、「共感性に支えられた個別性の自覚は、より成熟した他関係を築くための『健康な内閉』を促し、他者との孤絶状態における個別性の高まりは、自尊感情を低下させ健康な志向性の成長を妨げることになる」と述べている。自我体験についても同様の傾向があるのではないかと予想される。自我体験が、自分や世界への理解を深めるための健康的な問いである場合には、積極的な意味をもたらすであろう。しかし、自分や世界への拒否や疑念へつながらうような自我体験は、当人にネガティブな意味を与えるであろう。自我体験の報告をさらに細かく検討する必要があると言える。

引用文献

- 天谷祐子 1999 面接法による自我体験の調査方法について 名古屋大学教育学部紀要(心理学), **46**, 265-274.
- 天谷祐子 2002 「私」への「なぜ」という問いについて:面接法による自我体験の報告から 発達心理学研究, **13**, 221-231.
- 天谷祐子 2003 「私」への「なぜ」という問い—自我体験—に関する概観と展望 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要(心理発達科学), **50**, 29-48.
- 天谷祐子 2004 質問紙調査による「私」への「なぜ」という問い—自我体験—の検討 発達心理学研究, **15**, 356-365.
- Fenigstein, A., Scheier, M. F., & Buss, A. H. 1975 Public and private self-consciousness: Assessment and theory. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **43**, 522-527.
- 藤崎真知代 1994 児童・生徒の自己の発達に関する研究動向 教育心理学年報, **33**, 53-61.
- 福島 章 1999 日本人のアイデンティティ 鎌幹八郎・山下 格(編) ころの科学セレクション: アイデンティティ 日本評論社 Pp. 1-11.
- 後藤容子・向山泰代・辻平治郎・黒丸正四郎・新田愛・村田牧子 1989 自己意識に関する発達的研究(I)—Fenigsteinらの自己意識尺度を用いて 日本教育心理学会第31回総会発表論文集, 217.
- 今井明雄・押見輝男 1987 シャイネス尺度の検討 日本社会心理学会第28回大会発表論文集, 66. (押見輝男 1992 自分を見つめる自分—自己フォーカスの社会心理学 サイエンス社, 所収)
- 伊藤美奈子 1995 孤独感類型の変化から見た個人志向性・社会志向性の発達過程 心理学研究, **66**, 10-15.
- 岩原信九郎 1965 新訂版 教育と心理のための推計学 日本文化科学社
- 梶田毅一 1994 自己意識心理学への招待 有斐閣
- 黒沢 香 1993 多数派への同調に対する自己意識と自尊心の影響 心理学研究, **63**, 379-387.
- Marcia, J. E. 1966 Development and validation of ego-identity status. *Journal of Personality and Social Psychology*, **3**, 551-558.
- Marcia, J. E. 1993 The status of the statuses: Research review. In J. E. Marcia, A. S. Waterman, D. R. Matteson, S. L. Archer, & J. L. Orlofsky (Eds.), 1993 *Ego identity: A handbook for psychosocial research*. New York: Springer-Verlag. Pp. 22-41.
- 松田 惺 1990 自己・自我 無藤 隆・高橋恵子・

- 田島信元 (編) 発達心理学入門Ⅰ：乳児・幼児・児童
東京大学出版会 Pp. 210-222.
- Montemayor, R., & Eisen, M. 1977 The development of self-conceptions from childhood to adolescence. *Developmental Psychology*, **13**, 314-319.
- 諸井克英 1987 大学生における孤独感と自己意識 実験社会心理学研究, **26**, 151-161.
- 永井 均 1991 <魂>に対する態度 勁草書房
- 永井 均 1996 <子ども>のための哲学 講談社
- 中村陽吉 1990 「自己過程」の4段階 中村陽吉 (編)「自己過程」の社会心理学 東京大学出版会 Pp. 3-20.
- 岡田 努 1993 現代の大学生における「内省および友人関係のあり方」と「対人恐怖的心性」との関係 発達心理学研究, **4**, 162-170.
- 押見輝男 1990 「自己の姿への注目」の段階 中村陽吉 (編)「自己過程」の社会心理学 東京大学出版会 Pp. 21-65.
- 押見輝男 1992 セレクション社会心理学2：自分を見つめる自分 — 自己フォーカスの社会心理学 サイエンス社
- 押見輝男・渡辺浪二・石川直弘 1986 自己意識尺度の検討 立教大学心理学科研究年報, **28**, 1-15.
- 桜井茂男 1992 小学校高学年生における自己意識の検討 実験社会心理学研究, **32**, 85-94.
- Scheier, M. F. 1980 Effects of public and private self-consciousness on the public expression of personal beliefs. *Journal of Personality and Social Psychology*, **39**, 514-521.
- 下山晴彦 1981 青年期における「自分」の確立の研究 東京大学教育学部教育相談室紀要, **4**, 109-118.
- 菅原健介 1984 自己意識尺度 (self-consciousness scale) 日本語版作成の試み 心理学研究, **55**, 184-188.
- 菅原健介・山本真理子・松井 豊 1986 Self-consciousnessの人口統計学的特徴 日本心理学会第50回大会発表論文集, 658.
- 辻平治郎 1993 自己意識と他者意識 北大路書房
— 2003. 12. 26 受稿, 2004. 12. 2 受理—

Self-consciousness and Ego Experience of Asking Questions about “I”

Yuko AMAYA

Department of Educational Psychology, Graduate School of Education and Human Development, Nagoya University

THE JAPANESE JOURNAL OF PERSONALITY 2005, Vol. 13 No. 2, 197-207

Ego experience is defined as an incidence of asking questions about “I”, such as “Why am I the person I am?” and “Where have I come from?” In this paper, we report the research on the relationship between self-consciousness and ego experience. A questionnaire was administered to 239 junior high school and 228 college students. Results showed that 118 of the junior high school students (49.4%) reported ego experience, while 108 of undergraduates (47.4%) did the same. Public and private self-consciousness of junior high school students were not yet sufficiently differentiated. However, those who reported own ego experience had them more differentiated than those who did not, with a lower correlation between them. Also, both public and private self-consciousness related to ego experience in junior high school students. In contrast, only private self-consciousness of undergraduates related to ego experience.

Key words: self-consciousness, ego experience, junior high school students, undergraduates